せたかむい
発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十三号（毎月一日発行）
平成九年六月一日

北海の鰊場 古平風土物語〔最終回〕

思い出の余市山道が消え
積丹国道・229号線となる

高橋源五

■神仏の加護に感謝

この日は、全く“古平丸山観音様”“石狩生振観音様”に救われたのだと思った。

後になってのことだが、今回のあわや遭難？ 遭難騒ぎに、漁業家や海の若い衆が神仏に頼る気持ちがよくわかった。

■ようやくわが家に

私は、この吹雪の中を迎えに来てくれた兄（小野寺弥伝次）の馬そりに乗せられて、無事に家に（現・栄町小野寺源太郎）帰り着くことができた。

こうして辛くも命をとり止めたが、その後ずうっと船酔いがひどく、三日間ほどは満足に食ることも飲むこともできず、ただ薬だけを飲み続けていたのである。

■余市山道を歩く

私はこの大時化にはこりごりしたので、それからというものは、冬季間はほとんど船便に頼らないことにした。

当時、札幌市内の学校に進学していた人たち、（師範学校に木村庸三さん、斉藤一雄君、石岡石男君、関口憲一君、札幌商業学校の上野勇次郎君）と誘い合って、もっぱら余市山道（古平～余市駅間約二十七キロ）を歩くことにしたのである。

つまご（わらで編んだ冬のはきもの）を履きゲートルを巻いてリュックを背負って、雪の深い山道を歩くこと六時間。途中の四つの峠を越えなければならなかったが、この方が船酔いよりもずうっと楽であったし、仲間といっしょのこともあって楽しみでもあった。こうして十回くらいも歩いたように思う。おかげで、以来すっかり健脚に自信がついた。

■途中の部落での憩い

当時、古平から余市までの間には湯内（豊浜町）・島泊・出足平（白岩町）の三つの小さい部落があったが、ここに来るとひと休みするのである。その頃は学生服が珍しく、休んでいると子どもたちが寄って来るので、帽子を貸してやったり、聞かれるままに汽車や電車の話などをして喜ばれた。

この辺りの部落では冬になるとタコ漁が盛んであった。おやじさんたちとも顔見知りになり、煮ダコの足をかじりながら札幌のことなど話をする。

■峠の茶屋

出足平の部落からまた山に入り梅川峠に出ると、ここには草ぶきの一軒の茶店があった。余市の町を遥かに見下ろしてひと休みをする。ここではいつもあんぱんを食べお茶をすすった。ふもとの出足平から通って来ているじいさん、ばあさんとも顔なじみになった。

こうして元気づいて、また雪の道を突き進んだ。冬の峠からは石狩湾がよく見えた。

波にもまれながら船に乗って行く連中を笑いながら、四、五人での余市山道の冬道は、案外と楽なコースであった。

■思い出のハイキングコース

後のこと（昭和三年）だが、この余市山道が改修され、夏季間だけ（五月中旬～十月下旬）小型自動車が運行された。曲折の激しい、急坂の多い道路であった。

私はこれ幸いと、この山道を夏のハイキングコースにしたのである。リュックを背負って、歌をうたいながら悠々とひとり歩いた。三度ほども歩いて、大いに楽しんだことを今も思い起

⇦（次ページ三段目へ続く）

═百年の歴史を閉じる═

稲倉石鉱山〈14〉

■二酸化マンガンの生産

同業者が多くなり、生産が増えるにつれて価格も下がり、また、鉄鋼業界の需要が減ってきたこともあって、フエロアロエの生産を減らし、乾電池用の二酸化マンガンの生産が産が多くなってきた。粉砕機にかけられ二～三ミリに砕かれた鉱石は、昨年から導入された磁石選鉱という新しい方法で選別され、また、これまで鉱石を焙焼（ばいしょう）していたが、二酸化マンガン用にはばい焼はしない。

―社内活動と町内の行事―

■山間に流れる稲倉石小唄

山の単調な生活にうるおいと楽しみを、と採鉱課にいた中村覚が「稲倉石小唄」を作詞した。これが、鉄興社の広報誌『ていけい』に掲載され、これを『ていけい』の編集長をしていた小山賢が作曲した。

稲倉石小唄

一、稲倉石の鉱石は
東洋一のマンガン鉱
石はほんのり桜色
脈を求めて掘り進む

二、稲倉石のやまの幸
春は桜に秋紅葉
川の流れも清らかに
住めば都よわが里よ

（三、四番は省略）

この「稲倉石小唄」はやまに住む人たちに愛唱され、また、作曲をした小山賢夫人が日本舞踊の素養があったことからこれに振りつけをし、集会などで踊ったという。

■盆踊り大会

昭和三十八年ごろから盆踊り熱が高まり、市街地から指導者を呼んで来て越後盆踊りの練習を始めたが、これには婦人会の人や小・中学生が多く集まった。同時にヨサレ（ベッチョ）踊りというのも踊ったというが、どのような踊りであったのかは不明である。採鉱課にいた伊賀良男は笛の名手として、ま

（前ページより続く）

こすのである。

緑の林間からは青々と広がる石狩湾、対岸には紫色に煙るような増毛連峰がよく見え、目の下には部落の浜も見ることができた。さながら、箱根の山でも歩いているような気持ちになって得意であった。

こうして、古平～余市間の海陸のコースは、苦しみもあったがまた楽しみも多かった。

当時の思い出は尽きない。

═余　録═

その後（昭和三十三年）、思ってもみなかった海岸道路・二級国道が開設され、交通機関の進歩発達によって文化の高波が押し寄せ、このかっての余市山道が姿を消してしまったと聞いている。私は、この思い出の山道、ハイキングコースを惜しむもののひとりである。

――終わり――

× × ×

た世話役でもあった。

盆踊りの最終日になると、懸賞付きの仮装盆踊りが人気を呼んだ。盆踊りは盛況であったが、参加するのはどうしても婦人と小・中学生が多かった。

盆踊りは、閉山になる昭和四十四年まで続けられた。

× × ×

今回で、大変好評であった高橋源吾さんの『北海の鰊場・古平風土物語』が終わります。

平成四年八月から六十回にわたって、大正から戦前までの古平の生活の様子を克明に生き生きと伝えてくれました。残念ながら今回で終わりますが、次回からまた、古平に生きた人々について書いてくださいます。

「高橋さんて古平の人ですか」と、よく聞かれますので簡単にご紹介しておきます。

高橋源吾さんは、浜町（現在の栄町）に明治四十五年に生まれ、古平小学校を卒業後、札幌師範学校を卒業、後志・小樽の各小学校の教員をされて退職。現在は小樽市オタモイに在住しております。

遥かなる故郷の思い出 ローソク岩の不思議 [33]

橘 義春

―第三話―

むかし見たローソク岩は、さつまいもの下をちょん切っておっ立てたような、ずんぐりした形をしていた。今の方がほっそりとしていてローソクに近い形をしている。

ローソク岩は古平の海域から少し離れているが、私のように子どもの頃から古平で育った者は、ローソク岩も、セタカムイ岩も、モッコ岩も同じようにみんな懐かしさがある。

私が小学校を卒業して東京へ出てから五年ほど経ち、勤務先から十日間の休暇をもらって、久し振りに帰省したのは昭和十五年だったような気がする。

古平へ着いたとたんに目にしたのは、北海タイムスの第一面にでかでかと載っていた「ローソク岩の崩落」記事であった。あのずんぐりした姿で立っていたローソク岩が、真ん中辺りから唐竹割りにでも切られたように右側半分が崩れ落ちていた。このローソク岩の崩落は、私が古平に着く二日前のことであった。その翌日、防波堤に久し振りに散歩に行ったら、同級生で漁師をしている本間行雄君とばったりと出会った。

「どうだ、船に乗らないか」と、声をかけられ、

「船の修理がすんだんで、試運転でローソク岩まで行くんだけどどうだ。」と言ってくれた。これ幸いと乗せてもらうことにしたが、ほかに顔見知りの人も五、六人乗っていた。

ローソク岩までは大して時間がかからなかった。岩の周囲をぐるぐる廻ってみて、みんなびっくりした。あのずんぐりした岩が真ん中から割れて、崩れ落ちたかけらが下の岩場に山積みになっていた。近くで見ると、人が握りこぶしをつくり人差し指を立てたような格好をしている。陸側から見ると、観音様の立像のようにも見える。ローソク岩はもっと厚みがあるように思っていたが、見る位置によっては意外と厚みがなった。セタカムイ岩は一枚岩でローソク岩もそうかと思っていたが、石ころを積み重ねたような岩であった。それにあちこちに亀裂が入っていて、いわの下の部分にもそれが見られた。

船に乗っていた漁師の人たちの話では、大時化が来て大波をどーんと食らったら、根元からバタンと倒れ、バラバラになって海の底に沈むんではないかという悲観的な話であった。私は漁師でないのでよくわからないが、彼らはプロであり、大時化の恐ろしさ、大波の破壊力の怖さを体験しているからの話なのであろう。名物のローソク岩もこれで見納めかと、寂しい気持ちになってきた。

北海タイムスの記事には、『このローソク岩には昔から伝説があり、戦争があると必ず岩の頭の部分が欠けたそうだ。日清戦争、日露戦争、支那事変の時も頭が欠けたそうだ。そして欠ける時には頭に明かりがつくという。今回は岩の半分が大きく欠けたので、世界がひっくり返るような戦争が起きるのではないか』と、土地の古老の話として載っていたが、兵隊検査を二年後にひかえた私は、いやな予感がした。

そのあと間もなく日本が太平洋戦争に突入し、予感は的中した。戦争は悲惨な結末となり、古老の予言したようにまさしく世界が戦争でひっくり返った。

五十数年前に、もう見納めかと思ったローソク岩がドッコイ今でも生きている。戦争の伝説と歴史を見極めようと、防人のように凛として、襲いかかる怒涛と壮絶な戦いを繰り広げながら、今日も神秘的な姿で立っている。ローソク岩は不思議な岩である。

鰊番屋に札幌の小学生が修学旅行

竹内コト

鰊漁もそろそろ先が見えてきた昭和九年、景気も悪くなって母や姉たちも仕事がなくて困っていた矢先のこと。急に親方さんに呼ばれました。

「この夏休みに、札幌から小学生が番屋に来るので世話をしてほしい」

と、いうことでした。

札幌北光小学校の子どもさんたちが、夏休みの海水浴に来るというのです。番屋を貸すことになったので、掃除や準備をし、食事の用意もすることになりました。

しばらく空いていた部屋をすっかり掃除し、黒板を取り付けたり、台所の整理などして皆さんの来るのを待ちました。

定期船に乗って来て沢江の沖ではしけに乗り移り、浜に上りましたが、中には船酔いをした子どもさんもいました。

来たのは全員が六年生でしたが、番屋に入ると、初めてのことなのでみなさん驚いたり珍しがったりしていました。

宿泊中はちゃんと時間割が決まっていて、朝、起床するとラジオ体操を始めて、朝食のあと午前中、二、三時間勉強して、昼食のあとは前の浜に出て水泳や、自由に遊んでいたようでした。体の弱い子どもには、先生が手を取って泳ぎを教えていました。

なにしろ都会のお坊ちゃんみたいでしたから、風呂たきから炊事、洗濯、掃除と、母たちは大変だったようです。田舎者なものですから言葉づかいにも困ったり、また、食事の支度でカレーライスもわからず、コンビーフについて先生から説明を聞いていました。そのほかにも献立を渡される度に、母は間違いがないか確かめていました。

私もちょうど同じような年齢だったものですから、勉強を教えてもらったり、一緒に遊んでもらったりした思い出があります。

こんなことがあって、私も都会にあこがれていました。

あなたならなにがお好き

福井幸平

子どもの頃、いつか俺も熱いご飯に玉子をかけて食べる身分になりたい？　と思った。

ふと、こんなことを考え、ずいぶんと長く生きて来たものだと。多分、バナナとか玉子とか高価なものだったようだ。

旧制の留萌中学を出て来た中条さんという人と、鉱山の用度係にいっしょに勤めていたことがある。その先輩は、

「いやいや、俺は熱いご飯にバターをたっぷりかけて食べたい」とのこと。上には上があるものだと思った。

この方は二、三年して留萌の方と見合い結婚して、ある日、

「今日は家でご馳走するから来い」とのことでお伺いしたら、どこで手に入れたか、雪印のバターが膳の上にあった。

「福井君、いつか話したバターご飯だ」

そのバターご飯をたべさせてもらって、そのおいしかったこと、今でも忘れられない。その影響かどうか、以来、チャーハンがなにより好きになった。たしかに玉子よりいっそうまかった。ほんとのはなし！

古平の地名《8》

♣土器や石器を見つける

町内のアイヌの遺跡についてはほとんど調べられていません。畑で仕事をしていた人や、興味をもった子どもたちが土器の破片や石器類を見つけたのが、集められているだけというのが現状です。

♣アイヌの集落

今から百六十年ほど前の記録を見ると、当時のフルビラ場所にはヘロカルイシ（群来町）・ベンザイドマリ（入船町周辺）・チョベタン（チョペタン）・フルビラ川（鴨居木辺りから海岸までの河畔一帯？）・メナシドマリ（沢江町）・ラルマキ（沖町）の六つのアイヌ部落があると書かれています。

♣ホルカ・フルビラ

フルビラ川の上流にホルカ・フルビラという地名がありました。そのアイヌ語の意味（川の流れが逆流する）から現在の廻り淵だと考えられます。確かに名前の通り、ここでは川がうず巻いています。

ある本には、先にホルカ・フルビラがあって、その下流に当たるのでフルビラと呼んだ、とも書かれています。この辺りの川岸も沢江町側は切り立った崖が続いていますが「フレ・ピラ＝赤い崖」、というよりは別の解釈の「フル・ビラ＝（丘の）土が崩れて、地肌が現れている」という意味方がむしろぴったりしているようです。

♣フルビラ川から「古平」

「古平」という地名から、そこにある川の名前が古平川と名付けられたのかと思っていましたが、実は反対で、先にフルビラ川があったわけです。

このフルビラ川も上流にホルカ・フルビラがあったので、それから名付けられたとなりますと、古平の語源は「赤い崖」というより、「崩れて地肌の出た崖」の方が合うようです。

川柳

北政道

福祉センターに寄せて

スタッフの気くばり感謝老い集う
話し合う昔の記憶よみがえり
センターで時間忘れて居る憩い
カラオケも楽しく気分若返り
住む町の明日の福祉を模索する

北海タイムス柳壇入選（5／26）

夢でさえ海外旅行など見れず

渡辺ハツエ

満期日に合った孫等の入学日
節くれ手ダイヤに勝る光ある
病（や）んでます地球あちこち傷だらけ
換気扇夕餉（ゆうげ）の匂い外へ舞い
物価高ケセラセラです素寒貧（すっかんぴん）

北海タイムス柳壇入選（5／26）

田舎者いなかのよさを捨て切れず

岬短歌会詠草

群来の山の裾に連なる七軒町ここがわが亡き夫の故郷　竹内コト

ビスケット焼いて眺めて一つ食べ皿に並べる父の命日　長崎フユ

いつとはなく頼りし轟木さん岬会を離れゆくとぞ停年なれば　池田テル

はじめての給料と言ひ小遣ひをわれに呉れたり孫の優しさ　榊佳代

わが庭の木々いっせいに芽吹きそめ春の嵐にさ緑ゆるる　東美知

定期検査終へし結果は即入院と言葉やさしく医師は言ひたり　菅原節子

暖かき皆の心に支へられ元の生活にかへりしこの頃　田中香苗

電線に並び居しヒレンジャクの群餌台のりんご食べつくしたり　丹後初江

その昔古平に大火ありたるを忘るなと幾度もサイレンの鳴る　鈴木時子

一株に出でしし芍薬の赤き芽の親指ほどになりしを数ふ　堀典子

童らと婦美の裾野に分け入りて初夏の息吹の中に筒まる　魚屋友子

丸山のいただき覆ひゐし夕もやのはや下り来て海とひと色　堀昭子

朝霧に忽ち包まれ見えざれば今いちど呼びて夫の声を聞く　山口スヱ

蕾ひらくを長く待ち居しサボテンは今朝忽ちに大輪に咲く　越田由起子

―春の衛生週間―
すす払い

渡辺ハツエ

五月、六月は暑からず寒からずの良い季節、一年中で一番しのぎやすいと思います。六月十一日は入梅ですが、北海道にはつゆはないといわれています。

この春は天候不順で、農家にとっては大きな痛手になっているようです。農業は天候に一番左右されますから、農家のご苦労は計り知れません。一日も早い天候の回復を祈っています。

昔、子どもの頃、そして成人してからも思い出す六月は『春の衛生掃除』の月でした。各家庭で、お天気の日を見計らって「すす掃き」をするのです。生活様式がすっかり変わってしまった今の人には耳慣れない言葉でしょう。家財道具を全部戸外に出して太陽に当て、畳も出して、二枚ずつ立て掛けては太陽で干し、竹の棒で叩いてほこりを払い、ガラス拭きから床下までも掃除します。ほどよく太陽に当てた家財道具や畳、寝具などを家に運び込むと、小さいわが家でも一日はたっぷりかかります。終わったあとはさっぱりした爽快な気分です。子どもの頃、手伝いも結構役に立ちました。「今日はすす掃き」という日は、学校が終わると一目散に家へ帰ったものでした。

すす掃きが終わると、役場から来て検印済の証紙を玄関に貼ってくれます。子ども心にもそれを見ると安堵したものでした。

昔は大掃除をしても“粗大ゴミ”などは出なかったし、そんな言葉すら知りませんでした。昔の生活に比べると現代はあらゆる物資に恵まれ過ぎていて、これではいくらでも粗大ゴミは出るでしょう。戦時中の「欲しがりません勝つまでは」から、戦後の物資不足の時代を耐えて来ました。あの頃、まだ両親が

⇦（次ページ下段へ続く）

古平ホトトギス会

身の回り整理一と日や日脚のぶ　斉藤波留
垂直に煙の立てる刈田かな　越野清治
崩落の土砂にかなしきふきのとう　長谷川和子
初郭公万歩ここより折返す　福井幸平
花は葉に入退院の尚つゞく　越野スミ子
餌台のいじめの群れに椋鳥もをり　越野敏雄
木蓮の落花はじまる小屋根にも　仲谷比呂子
遺骨なき五十回忌や木の葉髪　仲谷美砂
読初や俳禅句丈今卒寿　水見句丈
逆縁の定めや雪の降る山河　大和田絵伊
今テニス夢中薫風抜けゆけり　仲谷安代
聞き役となって団扇の風送る　大島喜恵
時雨るゝや北山杉と里人　山口浪
遠足の子等捨て歩く野花かな　福井久美子

古平の方言（5）

・かね、かねが＝食べない、食べないか
「まんま（ご飯）かねが――」
・かまりかぐ＝においをかぐ
・からがえる、からがぐ＝縛る、結ぶ
・からっぽやみ＝なまけ者、骨惜しみ
「あれ イイからっぽやみだ」
・かながら、かんながら＝かんな（鉋）くず
・がんべ＝土壁、頭のおでき、かさぶた
・きかんず＝耳が遠い
「あいつ きかんずでねぇが」
・きかんぼう＝いたずらっ子、きかない子
「あの きかんぼう まだやったのが」
・きち、きつ＝水槽、ふろ桶
・きかない、きっかない＝乱暴な子、気が強い、強い子
・きっき＝じゃんけん
・きったぎる＝切る、ぶった切る
「この木 切ったぎるどォ」
・きっぱし＝きっぱり、はっきり
・きどころね＝着たまま寝る、（仕事で疲れて）そのまま横になる
・きばる＝無理する、威張る、見栄をはる
「あいつ ずんぶきばってるな」
・きびっちょ＝きゅうす（急須）
・きもやげる＝腹が立つ、いらいらする
・きらず＝（豆腐の）おから
・きんか＝耳が遠い、（きかんず）
・きんびいい＝気味がいい、いい気味だ
・ぐうぐど＝早く、さっさと
「ぐうぐどやったらいい」
・ぐうだら＝なまけ者、のらくら、ぐず
「酒飲んだらぐうだらでな」
・くそにもならねぇ＝何の役にも立たない
「あいつだら くそにもならねぇ奴だな」
・ぐだめぐ＝しっこく言う、ぐちを言う
「あいつにぐだめがれで まいった」
・ぐずる＝だだをこねる
・くたばる＝死ぬ、相手をばかにする言葉
・くだりもの＝本州から来た品物
・くちゃべる、くっちゃべる＝よくしゃべる
「よぅぐ（よく）くっちゃべる奴だな」
・くべる＝火の中にいれる、燃やす
・ぐりぐり＝リンパ腺がはれてできた
・くるべえ、くるべさ＝来るだろう
「もう くるべえ」
・くわる＝ふさがる
「雪で窓も くわってしまった」
・けずかる、けずがる＝（悪い言い方で）居る
・けたくそわるい＝しゃくにさわる、おもしろくない
・けったくる＝ける、（ぱっと）取り上げる
・けっちくせぇ＝けちくさい
・けっぱる＝がんばる、無理する
「（運動会で）ほれっ けっぱれ！」

（前ページ二段目より続く）

元気で、畳を叩いていた姿が懐かしく思い出されます。

「畳叩く音も聞かれぬ文化国」

さらに六月は、小学校の運動会の月でもありました。港町チョペタン川の側の通称「本陣の干場」が会場でした。忙しかった鰊漁期も終わってホッとひと息。町を挙げての運動会、大人も子どもも、一年中で一番心の和む楽しい行事であったのではと思います。郷土・古平町にマッチしたすばらしい運動会の歌もありました。

古平尋常高等小学校

運動会の歌

(1)
栄ゆく御世の空晴れて
波静かなる古平の
我が学び舎の春は長け
今日咲き出でし花二千

(2)
白は我が住む積丹の
峰にいただく朝の雪
赤は輝く群来の海の
夕日の色に似たるかな

(3)
この天然の影清く
姿やさしの朝の雲
今日は楽しと千代に咲く
我が学び舎の運動会